

珠玉のことばたち―浄土三部経と七高僧の教えより―

まえがき

本書は、もともと、月刊誌『大乘』に、「金言礼讃」のタイトルで二年間（二十四回）にわたって連載したものを、今回、一書として刊行させていただくものです。

前半の十二節は、「浄土三部経」のお言葉、後半の十二節は七高僧のお言葉を お借りして、その味わいを述べています。

あつかわせていただいたお言葉は、いずれも珠玉の至言であり、私の拙い文章では、その尊いおこころを充分にお伝えできていませんので、読者の皆さまは、どうか、「浄土三部経」や七高僧のお言葉そのものを、じっくりと味読していただきたいと思えます。

宗祖親鸞聖人がお作りになられた「正信偈」では、浄土三部経のご説法について、「唯説^{ゆいせつ}弥陀^{みだ}本願^{ほんがん}海^{かい}」と、お釈迦さまが、ただ阿弥陀さまのご本願をお説きになられるためだけを目的として、この世にお生まれになったと讃嘆されています。同様に、七高僧についても、「明^{みょう}如来^{にょらい}本誓^{ほんせい}応機^{おうき}」と、ここでも、弥陀の本願（如来の本誓）が、それぞれの時代や国々の人たちに、どのようにはたらきかけてくださっているか（応機）を明らかにされたと讃嘆されておられます。

本書を手にしてくださった皆さま方が、「浄土三部経」や七高僧のお言葉を通して、阿弥陀さまのご本願は、つねに私たち一人ひとりの上に、たえずはたらき続けていることを、再確認してくださいますことを、ひたすら念願しています。

目次

まえがき 4

浄土三部経

『仏説無量寿経』

- ①〈世語を欣はず〉 8
- ②〈往き易くして人なし〉 12
- ③〈田あれば田に憂へ〉 16
- ④〈独り生れ独り死し〉 20
- ⑤〈宮殿に生れて〉 24

『仏説観無量寿経』

- ①〈阿弥陀仏、此を去ること遠からず〉 28
- ②〈われいまなんぢがために〉 32
- ③〈なんぢはこれ凡夫なり〉 36
- ④〈一々の光明は〉 40

『仏説阿弥陀経』

- ①〈青色には青光〉 44
- ②〈われこの利を見るがゆゑに〉 48
- ③〈一切世間のために〉 52

七高僧

龍樹菩薩

〈人よくこの仏の無量力威徳を念ずれば〉 56

天親菩薩

- ①〈世尊、われ一心に尽十方無礙光如来に帰命したてまつりて〉 60
- ②〈仏の本願力を観ずるに〉 64

曇鸞大師

- ①〈「蟪蛄は春秋を識らず」といふがごとし〉 68
- ②〈氷の上に火を燃くに〉 72

道綽禪師

- ①〈説法のものにおいては医王の想をなし〉 76
- ②〈前に生ずるものは後を導き〉 80

善導大師

- ①〈順彼仏願故〉 84
- ②〈みづから信じ人を教へて信ぜしむること〉 88

源信和尚

〈慈眼をもつて衆生を視そなはずこと〉 92

法然聖人

- ①〈一念一無上・十念十無上〉 96
- ②〈わがあととは称名ある処すなはちわがあとなり〉 100

世語を欣はず、樂ひ正論にあり（『註釈版聖典』五一頁）

前半は、「浄土三部経」のお言葉を十二回にわたって味わっていききたいと思
います。

まず最初は『無量寿経』からで、その下巻の「衆生往生の果」（往生人
の果徳）として説かれる部分にこのお言葉があります。浄土に往生させていた
だいた者が得ることのできる、さまざまなお徳について説き示されている中の
一文です。

このお言葉に出あうと、私はいつも、『御伝鈔』に記された親鸞聖人ご臨終
の一段、「口に世事をまじへず、ただ仏恩のふかきことをのぶ」（『註釈版聖典』
一〇五九頁）の語が重ね合わされます。世の中の雑念を交えず、ただ正しい道、
真実の教えを求められた聖人のご生涯が想起されるのです。

聖人はまた、世間は虚仮不実であって、「ただ念仏のみぞまことにておはし
ます」（『同』八五四頁）とも述べられています。『歎異抄』のこの部分では、
世間のことを「火宅無常の世界」と示されています。「火宅」とは火のついた
家のことです。明日が保証されない「後生の一大事」という火がついている
にもかかわらず、それに気付かずに家の中で遊ぶことはかりに熱中している。
これが「火宅無常の世界」です。

私たちは、世間のことばかりが気になります。「景気は、どうなるんだろう」、
「また税金が上がるのか」、「世の中、どうなっているんだ」。こんなことばかり

に明け暮れています。そのことばかりに気を取られて、「私は、何のために人間に生まれてきたのか」、「この私のいのちの落ち着き先は、どこなのか」という最も大切なことが見失われているのではないのでしょうか。

世の中の不条理には、しっかりと声を上げていくことも大切でしょう。しかし、世の中に振り回されるのではなく、真実の教えに出遇うことによってこそ、世間の価値観に対しても、確かな視座が生まれると思うのです。

『歎異抄』には、「念仏者は無礙の一道なり」（『註釈版聖典』八三六頁）とのお言葉もあります。念仏の教えを中心にした生き方を送る者は、世間の価値観に縛られたり、振り回されたりせずに、まっすぐな浄土への道を歩むことができるのです。

浄土に往生された人の功德ですから、私たちが完全に実行することはとてもできません。しかしながら、浄土の真実のあり方を知ることによって、今の私

たちの生き方が反省させられ、少しでも真実になつた道を歩もうとする意志が生まれるのではないのでしょうか。

浄土は、私たちの生き方を映し、私たちの生き方を質す、法の鏡と言えるでしょう。

「世語を欣はず、樂ひ正論にあり」
目標としたい生き方です。